

青年期における自己理解の深度化と対人関係性について - 高機能広汎性発達障害の青年期支援に向けて -

篠田 晴 男^{*1}
石井 正 博^{*2}

Importance of Self-understanding and Ability to Interact with Others in Adolescence : Implications for Providing Support to Adolescents with High-functioning Pervasive Developmental Disorder

SHINODA Haruo and ISHII Masahiro

はじめに

高機能広汎性発達障害のある子どもたちは、思春期や青年期を迎えると、自己と他者との違いに気づくようになると言われている。今日、障害告知の問題は、このような本人の訴えをきっかけとしてなされることが少なくない。障害名を告知した経験を持つ広汎性発達障害児の親を対象に、明翫（2005）はその経緯を調べた。一番多かった回答は「子どもに自己理解や自分の課題を伝えるため」であり、単に困った行動への対策だけではなく、自立や就労、あるいは青年期に向けた準備として、障害告知がなされることが多いと考えられた。また告知には、障害特性を抱えつつ自分が生きていく方向性を考えるという自己決断を促す意味をも含んでいた。

このように高機能広汎性発達障害のある者では、自己理解の問題は健常な青年と比べて、障害の告知、青年期に特有な心理的困難さ、就労など生涯発達の課題と深く関わっている。自己理解の概念自体は、次に述べるような議論を経て現在に至っており、本研究は現時点でのその能力評価にかかわる課題を整理し、支援の手がかりを探索することを主眼としたものである。

健常児・者における自己理解の発達に関する研究

佐久間・遠藤・無藤（2000）は、これまでの自己理解研究の中で、抽象度の高い質問技法によって自己を捉えようとした Damon & Hart（1988）の試みを検証している。Damon et al.の研究では、自己の様々な側面にわたる複数の質問項目を、より具体的な形で子どもに問うインタビュー法を用いて、幼

* 1 立正大学心理学部教授

* 2 ソフトバンク BB 株式会社

児期から青年期の自己の多面的理解の発達を探り、包括的な自己理解の発達に関するモデルを提唱した。

実際に4歳から14歳の子どもに対して、18ヶ月の間隔をおきながら3年間にわたる臨床的面接調査を実施し、横断的・縦断的両側面から自己理解の発達についての実証的検討がなされた。

その際に、軸となった質問インタビューの項目は、以下の7項目である。

「客体としての自己に関する項目」

自己規定（「あなたはどんな人ですか」など）

自己評価（「自分について一番好きなところはどこですか」など）

過去と未来の自分（「5年後のあなたは今と同じだとおもいますか、それとも違うとおもいますか」など）

自己の関心（「あなたはどんな人になりたいですか」など）

「主体としての自己に関する項目」

連続性（「もしあなたが毎年変化しているとすれば、それでもあなただということがなぜわかりますか」など）

独自性（「あなたが他のどの人とも違うところはどこですか」など）

自己形成の主体（「あなたはどのようにして今のあなたになりましたか」など）

回答から、客体としての自己（自分に見られている自分の特徴）は身体的、行動的、社会的、心理的自己という4つの基本的構成要素に分類された。年少児童では身体的なものに限られず、行動的、社会的、心理的な領域についての陳述も多いこと、青年や成人の自己概念では、身体的、社会的、行動的領域に関するものが多いことが指摘された。また、主体としての自己（見ている自分）は、連続性、独自性、自己形成の主体の3つの側面から分類され、各構造面は4つの発達レベルに分類された。

児童期前期は「範疇的自己規定」、児童期中・後期は「比較による自己査定」、青年期前期は「対人的意味づけ」、青年期後期は「体系的信念と計画」という各側面に共通して発達する4つの自己組織化の原理が提起された。「範疇的自己規定」から「体系的信念と計画」にいたる自己概念の組織化原理の発達が示唆されるものの、例えば身体的自己から心理的自己へとカテゴリー間の移行や変化が生じるようなことは想定されていない（山地，1997）。なお、このような青年期に到る発達において、自分をどのように、またどの程度理解しているのか、さらに自他関係の中で自己と他者の同型性や個性性をどのように理解できるかという点が、重要とされた。

発達障害児・者における自己理解の発達に関する研究

Damon et. al.の研究では幼児期から青年期にいたる幅広い年代にわたり自己の多面的理解の水準を探索しうる可能性が見出された。次で同様なインタビュー法によって導き出された発達障害者の自己理解に関する研究の現状を検討した。

(1) 知的障害者の自己理解

小島・池田（2004）は16歳から45歳の知的障害者（平均精神年齢8.4歳）を対象にDamon et. al.のインタビュー法を用いて、その自己理解の特性を検討した。知的障害者は生活年齢を統制した健常者と比

較して、自己理解に関する質問項目に対する回答が困難であった。知的発達が同程度の幼児・児童の自己理解を対象とした佐久間ら（2000）の研究との比較では、人格特性に関する陳述に比べ行動特性や身体的・外的特性に関する陳述が多かった。さらに、精神年齢の上昇に伴い自己の否定的側面を抽出できるようになるという点で、健常児と同様な傾向が見出されたが、回答自体には困難さが少なくなかった。よって、知的障害者では生活年齢が同程度の健常者、また精神年齢が同程度の健常児よりも、自己理解が遅滞していることが指摘された。ただし、表出上の困難さに問題があることを無視できず、より詳細な分析と反応を検出しようとする回答方法についての検討が必要とされた。

(2) 自閉性障害者の自己理解

Lee & Hobson (1998) は Damon & Hart (1988) のインタビュー法を用いて自閉症児の自己理解の発達について検討している。その結果、客観的自己の4つのカテゴリーのうち、特に社会的自己のカテゴリーにおいて言及数が少ないことを明らかにした。また、主観的自己については、自己の連続性に関する陳述において、「名前」や「声変わり」などの即物的手がかりを元に自閉症児が自己の連続性を捉えていることなどの特徴が明らかにされている。これらのことから自閉症児は対人関係性障害により社会的自己に関する自己理解の発達に関する困難さが示唆された。また、主観的自己に関して即物的な事柄を手がかりにした陳述をしていることから、自己について主体的に考えることの困難さも示唆された。

吉井・吉松（2003）では14～18歳の自閉性障害児と生活年齢とIQをマッチさせた知的障害児を対象として自己理解課題、他者理解課題、感情理解課題を行い、その関連性を検討した。自閉性障害児群は知的障害児群と比較していずれの課題においても成績が劣っていた。加えて自閉性障害児群を自己理解の程度により2群に分けて他者理解課題・感情理解課題の成績を比較したところ、自己理解高群のほうが低群に比べこれらの成績が高かったという。

白瀧・村上・安藤・橋本（2003）は12歳から16歳までの高機能広汎性発達障害児を対象に、その自己理解の特性について Damon et. al. のインタビュー法を用いて検討し、健常児と異なる自己理解の特性を報告した。まず、健常児と比較して回答内容は発達の低レベルに留まっていることが示された。自己理解のうち主観的自己理解が不十分であり、他者から自己理解について問われたときに、この不十分な自己理解を自己から見た他者の理解で代用して使用すること、そのために彼らの回答では、自己の主体的意識が乏しく、まるで自己のことを他者のように語ってしまうとされた。なお、知的障害を伴う自閉性障害者との違いについて、知的障害を伴う自閉性障害者は全体としてインタビューへの回答数が少ないのに対して、高機能広汎性発達障害者は健常者と比較しても回答数に遜色はないこと、知的障害を伴う自閉性障害者の回答は社会的カテゴリーに分類されるものが特異的に少ないのに対して、高機能広汎性発達障害者の回答は社会的カテゴリーも含め健常者と比較して遜色がなかったことも報告された。これらの違いから、これまで自閉症の自己理解の特徴とされていたものが自閉性障害と知的障害の総体であり、高機能広汎性発達障害の自己理解の特徴にこそ、自閉性障害の純粋な自己理解の特徴が明示されるとした。

以上、Damon et. al. のインタビュー法には健常者だけでなく、知的障害・自閉性障害・高機能広汎性発達障害各々の自己理解の特徴が反映されることが明らかになった。知的障害者については自己理解が精神年齢から期待される発達より遅滞している可能性があること、自閉症者では対人関係性を通して

自己理解を発達させることの困難さが示され、さらに主観的自己理解の困難さも示された。また高機能広汎性発達障害の自己理解の特徴は知的障害を伴う自閉症者の自己理解の特徴とは異なり、社会的カテゴリーについての回答などに独自の特徴が認められたが、自閉症者と同様に主観的自己理解の希薄さも示された。

しかし、これらの研究は青年期の発達障害者だけを対象としたものが多く、その自己理解がどのように発達してきたのかという過程については不明な点がある。今後は Damon et. al.の研究のように幼児期から青年期における発達障害児・者の自己理解の発達を縦断・横断の両面において、その健常児・者と比較検討していく必要があると考えられた。

質問紙による自己理解尺度作成の試み

Damon et. al.の自己の様々な側面に及ぶ複数の質問を具体的な形で問うインタビュー法は、幼児期から青年期にいたる広範な年代、さらには発達障害児・者の自己理解を知る方法として、その有効性が評価されている。しかし、そのインタビュー法によって抽出された自己理解の深度化の評価方法については、問題も指摘されてきた。佐久間ら (2000) は幼児期・児童期の自己理解の追試的研究を行い、Damon et. al.の自己理解モデルがある程度妥当であることを明らかにしたが、「客体としての自己」のカテゴリー分類の曖昧さなどが指摘されているほか、「主体としての自己」、「客体としての自己」に設定されている各カテゴリーについて全て4つの発達水準が存在するのかという点についても疑問が提起されている。また、Damon et. al.はインタビュー法の有用性を指摘し、質問紙法による自己概念の研究を否定しているが、自己理解の発達水準を検証する簡便で量的な指標として質問紙による自己理解とインタビュー法によって抽出された自己理解の両面から検討する余地があると考えられる。そこで、今回の研究では、自己理解の深度化を定量的に測定できる尺度の作成を試み、青年期の自己理解の発達について試行的な検討を行った。

(1) 予備的検討

「自己理解」に関する質問紙調査に先行し、「自己理解」が一般的にどのような意味に捉えられているか、また、どのような側面を持つか予備的検討を試みた。

大学3年生8名を対象に、「1. あなたが考える自己理解できている人とはどんな人ですか?」、「2. あなた自身が思う自己理解できている人を思い浮かべてください、その人の特徴・特性を書き出してください」、「3. あなた自身が自己理解できていると思うことを教えてください」という3つの問いに対して自由記述を求め、KJ法を用いて回答を分類した。

回答を分類した結果、「自己の特性の理解」「自己理解している人に付随するイメージ」という2つに分類された (Table 1)。本研究では、「自己の特性の理解」の自由記述の内容に着目し検討した。「自己の特性の理解」の内容から、自己理解という言葉は自己の心理・行動・身体などの幅広い側面についての理解を表していることが確認され、Damon & Hart (1988) の自己理解モデルの客観的自己のカテゴリーの内容を支持するものであった。よって、本研究では自己理解を「自己の身体・行動・人格など様々な特性について理解していること」と改めて定義することとした。

Table 1 自由記述の回答内容

自己の特性の理解	自己理解している人に付随するイメージ
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の長所と短所を理解している ・自分の能力を理解している ・自分の休息法を知っている ・自分の目標を理解している ・自分の興味のあるものがわかる ・自分の趣味を理解している ・自分の身体的特徴を理解している ・自分を表現することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己受容ができています ・責任感が強い ・自分に興味がある ・他者理解ができる ・将来の展望がある

次に、本研究では自己理解の概念に関連する項目内容を吟味し、これまでの面接聴取型自己理解尺度を改変し、より簡便な評価をめざして質問紙型自己理解尺度の作成を行試みた。

(2) 方法

(a) 調査内容

予備調査の自由記述の項目内容に、自己の特性について具体的に表現していると思われる自己認識欲求尺度（上瀬，1992）の中から適切と思われる項目内容を選択して加え、計47項目からなる質問紙を作成した。さらに、作成した47の項目を佐久間（2000）の自己抽出カテゴリーを用いて、「身体・外的属性」「行動」「人格」という三つのカテゴリーに分類した（Table 2）。いずれの項目も、「当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の5段階評定を適用した。

なお、自己理解と、社会的場面や対人的場面における自身の表出行動や自己呈示をモニターする（観察、調整、統制）能力（岩淵，1996）との関連をみるため、改訂版セルフモニタリング尺度（以下SM尺度）を用いてセルフモニタリング能力との関連を検討した。加えて、高機能広汎性発達障害者の自己理解についての検討を意図して、自己理解の質問項目と自閉症スペクトラム指数（Autism-Spectrum Quotient：以下AQ）との関連についても検討した。

Table 2 佐久間 (2000) の自己抽出カテゴリーを用いた自己理解尺度の分類

<p>1) 身体的・外的特性 (12項目)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の体型合った体重を知っている。 ・自分に合った食事の量を知っている。 ・自分に合った睡眠時間を知っている。 ・自分に合ったファッションがわかっている。 ・自分に合った髪型がわかっている。 ・自分の身体的特徴を知っている。 ・自分の容姿の良い所を知っている。 ・自分の容姿の悪い所を知っている。 ・自分は人と比べてどの程度の運動能力があるか知っている。 ・自分は人と比べてどの程度の社交的能力があるか知っている。 ・自分の容姿にはどの程度の魅力があるか分かっている。 ・自分の性的魅力がどのくらいあるのか分かっている。
<p>2) 行動特性 (22項目)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の特技を知っている。 ・自分に合ったリラックスの方法を知っている。 ・自分に合った気分転換の方法を知っている。 ・自分の性格に合った目標が分かっている。 ・自分の能力に合った目標が分かっている。 ・自分の好きな物事を知っている。 ・自分の嫌いな物事を知っている。 ・自分の関心のある事柄を知っている。 ・自分の関心のない事柄を知っている。 ・自分のやるべきことを知っている。 ・自分の性格に合った趣味が分かっている。 ・自分の能力に合った趣味が分かっている。 ・自分の限界点を知っている。 ・自分の実力を知っている。 ・自分に合ったペースを知っている。 ・自分の得意なことを知っている。 ・自分の不得意なことを知っている。 ・自分のことを文章で表現できる。 ・自分は「こんな人だ」とほかの人に説明できる。 ・自分について一言で説明できる。 ・自分の知的能力がどれくらいあるのか分かっている。 ・自分の知識が人に比べて多いのか少ないのか分かっている。
<p>3) 人格特性 (13項目)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分にとって何が必要か分かっている。 ・自分にとって何が心の支えなのか分かっている。 ・今の自分自身をどのくらい認めているのか分かっている。 ・自分が今の自分自身の何を受容できているのか分かっている。 ・自分が今の自分自身の何を受容できていないのか分かっている。 ・自分の性格の長所を知っている。 ・自分の性格の短所を知っている。 ・自分は人と比べてどの程度の責任感があるのか分かっている。 ・自分がどれくらい人に厳しいのか分かっている。 ・自分がどれくらい人に優しいのか分かっている。 ・自分は人と比べてどの程度の探究心があるのか分かっている。 ・自分は人と比べてどの程度の向上心があるのか分かっている。 ・自分は人と比べてどの程度、好奇心旺盛なのか分かっている。

(b) 調査対象

大学生・社会人の男女計25名。平均年齢ならびに標準偏差を男女別と全体について示したのが Table 3である。なお、社会人には、社会人学生も含まれている。

Table 3 対象者の平均年齢・標準偏差・人数

	男 性	女 性	全 体
大学生	21.45 (0.82) n = 11	20.9 (0.93) n = 9	21.2 (0.89) n = 20
社会人	28.0 (2.83) n = 2	32.3 (6.66) n = 3	30.6 (5.46) n = 5
全 体	22.5 (2.59) n = 13	23.8 (5.96) n = 12	23.1 (4.51) n = 25

(3) 結 果

(a) 自己理解・SM・AQ 各尺度の平均得点と性差

大学生ならびに社会人の自己理解尺度得点と SM・AQ 尺度の総合得点の平均値は、全体では、自己理解尺度得点で、女子の得点が男子に比べて高く ($t(23) = -2.11, p < .05$)、下位尺度の身体、行動、人格に関する得点で、身体において有意な差がみられた ($t(23) = -2.64, p < .05$)。さらに、AQ 得点において、男子の得点が女子に比べて高かったが ($t(23) = -2.30, p < .05$)、SM 尺度得点では、有意な性差を認めなかった ($t(23) = -1.27, ns$)。なお、大学生と社会人で比較した場合、社会人の標本数が少ないこともあり、統計的に有意な差を認めなかった (Table 4)。

AQ 尺度の総点における性差は、若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright (2004) を支持するものであった。

Table 4 自己理解尺度・SM 尺度・AQ 得点の平均値と標準偏差

大学生		年 齢	自己理解	SM	AQ
男性 (n = 11)	平均	21.5	159.5	49.5	22.5
	S D	0.82	22.25	3.47	6.86
女性 (n = 8)	平均	20.9	175.9	51.7	18.6
	S D	0.93	25.98	9.04	5.53
全体 (n = 19)	平均	21.2	166.9	49.4	20.7
	S D	0.89	24.79	3.13	6.45
社会人					
男性 (n = 2)	平均	28.0	164.5	48.5	21.0
	S D	2.83	0.71	2.12	1.41
女性 (n = 3)	平均	32.3	191.7	56.0	10.7
	S D	6.66	26.31	9.64	1.15
全体 (n = 5)	平均	30.6	180.8	52.75	14.8
	S D	5.46	23.83	8.96	5.76

(b) 自己理解の深度化と SM 尺度・AQ 尺度得点との関係

自己理解の深度化と SM 尺度・AQ 尺度得点との関係を検討するため、尺度間の相関値を求めた。Table 5に示されるように、SM 尺度得点とは自己理解の下位尺度も含めて高い相関値が得られた。また、AQ 尺度得点との間でも、一定程度相関することが確認され、下位尺度も身体を除き有意な負の相関が示された。

質問紙により評定された自己理解尺度の深度が、SM の能力と正の相関を有することから一定の基準関連妥当性を有し、かつ AQ とも関連することが確認された。

Table 5 自己理解尺度と SM 尺度・AQ 尺度得点との関係

自己理解	SM	AQ	
自己理解	.71**	-.50*	
SM		-.39	
AQ			
自己理解	身体	行動	人格
SM	.64**	.67**	.67**
AQ	-.36	-.53**	-.45*

** : 1 % , * : 5 %水準で有意

(4) 考 察

本研究では、質問紙による自己理解尺度の作成を通して青年期の自己理解の深度化の程度を評価し、さらに SM 尺度を用いてセルフモニタリングと自己理解の関連を、また AQ を用いて自閉症スペクトラムと自己理解との関連を試行的に検討した。

(a) 自己理解尺度の作成とその特徴について

大学生を対象に自己理解に関する自由記述への回答を求め、その回答結果を基に自己理解尺度の作成を試みた。自己理解に関する自由記述において、自己の心理・行動・身体的側面という多岐にわたる内容の記述が見られた点は、Damon & Hart (1988) の自己理解モデルと同様の結果であった。しかし、分類が不可能な内容の記述が多かったことや、直接自己理解と結びつかない内容の記述も多かったことから、「自己理解」という語自体が一般には曖昧で多義的な内容として捉えられていることが確認された。

また今回の結果において、男性より女性の自己理解得点が高いという性差がみられた。これまでの面接法を用いた自己理解の研究において性差の報告は限られているが、例えばダウン症児・者を対象とした自己概念の研究 (Begley, 1999) では男子よりも女子のほうが肯定的評価を行うとの報告もある。青年期に相当する年代が主であったこと等、性差がより強調された可能性もあり、対象者の年齢や測定方法を含め、今後詳細に検討していく必要があるだろう。

なお、社会人群と大学生群との比較では統計的な差異を認めなかったが、今後社会人群の標本数をさらに増やした上で改めて、社会経験や生活年齢と自己理解の深度化の関係を検討したい。

(b) 自己理解の深度化とセルフモニタリング・AQ 各尺度との関連について

自己の様々な側面を理解する上では、社会的対人場面において自己の表出行動や自己呈示をモニターする能力（岩淵，1996）も高いことが予想される。今回、限られた標本数であったが、1%水準の高い正の相関値が得られたことから、自己理解の深度化が想定される者ほど、セルフモニタリングの能力も高く、自己理解尺度には一定の基準関連妥当性があるものと考えられた。

また、自己理解尺度とAQ尺度の間にも5%水準の負の相関が認められ、自己理解の深度化が想定される者では、AQ尺度に反映される対人関係性の困難さが低いことも示唆された。特に有意な相関値が得られた行動・人格面にかかわる自己理解の深度化は、対人関係性の能力や健常者における自閉症スペクトラム傾向に影響を及ぼすものと考えられた。

青年期のいわゆる軽度発達障害者では、上瀬（1992，1996）のいう「自己認識欲求」の高まりが示唆される一方で、自己の否定的な側面を知りたくないという「ネガティブ情報回避欲求」も同時に高まり、正確な自己認識ができずに（越智・細川，2006）、自我同一性の混乱を増幅させていることも考えられる。周囲の不適切な対応がもたらす二次性の自己評価の低下（別府・坂本，2005）など、自己理解の困難さの背景要因も複合的である。自我同一性の確立という発達課題に向かい、つたない心理機制でやりくりするよりも、自身の得手・不得手の理解に立脚したわずかな成功体験の積み上げこそが、肯定的な自己像の形成に寄与するものと考えられる。

(c) 高機能広汎性発達障害のある青年における自己理解の特徴について

白瀧他（2003）は高機能広汎性発達障害児の自己理解を健常児と比較検討し、客観的自己領域におけるカテゴリー間の回答数の分布に差がみられない一方で、回答内容が発達的に低レベルに留まると報告している。

本研究ではAQ高群がAQ低群と比較した場合、自己理解尺度の下位カテゴリー間で分布に差が見られないものの、自己理解得点は低いという結果が得られた。このような特徴が高機能広汎性発達障害のある青年の自己理解の特徴を示唆しているのか、次に実際の事例による検討を述べる。

高機能自閉症のある青年男性の例

X氏は、演習、実習など少人数のグループ学習において、コミュニケーションの困難さが顕在化し、特に発言を迫られると、パニックになることもあった。また、言語的な指示理解における困難さも大きく、レポート作業においても筆が進まないなど、ライティングスキルの問題もみられた。X氏は、幼児期より、検診・療育機関でコミュニケーションの困難さを指摘されてきたが、海外での異文化体験の影響も少なくないとの両親は考えていた。児童精神科では、高機能自閉症と診断されていた。X氏との面接では時空間的に環境を構造化し、登校可能な状態の時に、科目履修とレポート作成に関する学習戦略を検討した。このような心理教育的支援により、学習面で一定の成果を獲得することができ、肯定的な自己像の獲得を促す根拠となった。

さて、X氏の主なアセスメントのプロフィールは次の通りである。アッケンバッハによる自記式問題行動チェックリスト成人版（ASR）では、不安・抑うつ項目と注意の項目が臨床域にあり、感情コ

ントロールの困難さと聞き取りや計画性など注意の困難さといった情緒と認知の問題が併存していることが示唆された。WAISⅢではFIQは118と高いものの、VIQ121>PIQ109と言語性と動作性のディスクレパンシーは大きく、認知的なアンバランスも理解された。

次いで、自己理解尺度・セルフモニタリング尺度・AQ得点について、大学生・社会人の男子の平均得点ならびにSDと比較検討した (Table 6)。AQは平均を大きく上回り、逆にSMは平均を大きく下回った。自己理解得点は平均を上回るものの、1SD範囲以内であった。自己理解の下位尺度では身体、人格が平均を上回ったが、行動ではその差はわずかなものであった。X氏においては、自己理解得点の上からは客観的自己理解がなされているもののSM得点は低値で、自己理解の深度化が自己の行動調整能力に反映されているとは言い難いことが推察された。事例においては、知的障害を伴わない場合、自己理解がある程度可能なものと考えられたが、適切な社会的行動へと結実させていく過程の問題と支援ニーズは存在することを認識しておくべきであろう。

Table 6 男子の平均得点との比較

	自己理解	SM	AQ
男子平均	160.3	49.4	22.2
男子SD	20.4	3.3	6.3
A 氏	177.0	29.0	31.0
自己理解	身体	行動	人格
男子平均	38.2	78.3	43.8
男子SD	5.1	11.8	6.2
A 氏	47.0	75.0	55.0

多面的評価に基づき自己理解の深度化を促す上で、チェックリストなどの質問紙法による評価は、困難さの存在と援助ニーズの確認に有益ではあったが、場面によって問題化する、しないが左右される状況依存性の影響は避けがたい。このような点で、半構造化面接による体系的な困難さの聞き取りも欠かせないこと、SMなど異なる視点から自己にかかわる質問紙を併用して検討することが必要と考えられた。さらに、困難さの背景にある認知障害・社会性障害については、より掘り下げた検査が必要と考えられた。

以上、標本数も限られた試行的検討ではあるが、今後の質問紙法を用いた自己理解研究や自己理解の深度化の評価法としての有用性を予見するものである。

引用文献

- 明翫光宣 (2005). 子供が自分の個性 (障害) を理解するとき. アスペハート, 11, 36 - 42.
- Begley (1999). The self-perceptions of pupils with Down syndrome in relation to their academic competence, physical competence and social acceptance. *International Journal of Disability, Development and Education*, 46(4), 515 - 529.
- Damon, W. & Hart, D. (1988). *Self-understanding in childhood and adolescence*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 別府哲・坂本洋子 (2005). 登校しぶりを示した軽度知的障害における自己の発達と他者の役割. *心理学*, 25(2), 11 - 22.
- 岩淵千明 (1996). 自己表現とパーソナリティ. 大淵憲一・堀毛一也 (編) パーソナリティと対人行動. 対人行動学研究シリーズ5 誠信書房 pp.53 - 75.
- 上瀬由美子 (1992). 自己認識欲求の構造と機能に関する研究 - 女子青年を対象として -. *心理学研究*, 63(1), 30 - 37.
- 上瀬由美子 (1996). 自己認識欲求と自己概念不明確感の関連. *東京女子大学紀要 論集*, 第46巻, 83 - 98.
- 小島道生・池田由紀江 (2004). 知的障害者の自己理解に関する研究 - 自己叙述に基づく測定の試み - *特殊教育学研究*, 42(3), 215 - 224.
- Lee, A., & Hobson, P. (1998). On developing self-concepts: A controlled study of children and adolescents with autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 1131 - 1144.
- 佐久間路子・遠藤利彦・無藤隆 (2000). 幼児期・児童期における自己理解の発達 - 内容的側面と評価的側面に着目して - *発達心理学研究*, 11(3), 176 - 187.
- 白瀧貞昭・村上凡子・安藤真紀子・橋本愛子 (2003). 高機能自閉症およびアスペルガー症候群における自己意識の特性. *厚生労働省科学研究費補助金 こころの健康科学研究事業 平成13~15 高機能広範性発達障害の社会的不適応とその対応に関する研究*, 82 - 89.
- 越智・細川 (2006) 軽度発達障害をもつ青年の自己認識欲求. *日本 LD 学会第15回大会発表論文集*, 368 - 369.
- 山地弘起 (1997). 自己の発達. 井上健治・久保ゆかり (編), *子どもの社会的発達* (pp.99 - 111): 東京大学出版会.
- 吉井秀樹・吉松康文 (2003). 年長自閉症児の自己理解, 他者理解, 感情理解の関連性に関する研究. *特殊教育学研究*, 41(2), 217 - 226.
- 若林明雄・東條吉邦・Simon Baron-Cohen・Sally Wheelwright (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化: 高機能臨床群と健常成人による検討. *心理学研究*, 75(1), 78 - 83.